

令和元年度 男女共同参画ネットワークセミナー基礎講座

「笑って考えよう！男女共同参画社会～男性の家事・育児が社会を救う！～」

講師：瀬地山 角 さん（東京大学教授）

5月11日（土）ぴゅあ総合 大研修室

県内市町村男女共同参画推進委員などを主な対象とした、「男女共同参画ネットワークセミナー基礎講座 笑って考えよう！男女共同参画社会～男性の家事・育児が社会を救う！～」と題した講演会を拝聴した。

この日の講師、東京大学教授である瀬地山角さんは、ジェンダー論の研究者ということもあって、10年間2人の子どもの保育園の送り迎えと、現在も夕食づくりを担当している男性の家事・育児の実践者である。また、日本テレビ「世界一受けたい授業」の東大生100人へのアンケートで東大の人気講義No.1に選ばれ、関西弁で話されるユニークで笑いのとれる語り口は、会場を終始なごやかな空気に包んでくれて、流石の一言であった。

都道府県別の妻の有業率（2015年国勢調査）が高いのは、第1位が山形県で75.1%。2位以下が福岡県、島根県、鳥取県、富山県と続き、山梨県は69.7%で15位との報告があった。逆に低いのは第1位が奈良県で56.9%。2位以下は大阪府、神奈川県、兵庫県、埼玉県と続くことから分かるように、夫就業世帯の妻の就業率は、大都市や政令指定都市よりも地方都市の方が高いことが分かった。また、日本の共働き世帯の家事時間（2016社会生活基本調査）について報告があり、男性は一日平均46分の家事関連時間に対して女性は4時間54分であった。更に、6歳未満（就学前）の子を持つ男性の育児時間は49分なのに対して女性は3時間45分であった。数的に女性の負担はやや減ってきているが、この家事時間に関わる男女の差はあまりにも大きく、「社会的に問題にすべき水準である」と警鐘を鳴らされた。

なお、現在、男性女性ともに結婚相手の条件として求めるのは1位が人柄（相性）だが、女性は男性に対して2位に家事・育児の能力、3位に仕事への理解を挙げており、一昔前に重視されていた「経済力」はずいぶん下位に追いやられている。やはり、現在の女性は男性に対して積極的な家事、育児への関わりを求めており、今後のこの国のライフスタイルには男性の家事・育児能力の向上が欠かせないことを示唆された。

そして、瀬地山さんが言われた「家事は手伝うものではなく、共有・分担するものである」という言葉とともに、「女性活躍推進のみにワーク・ライフ・バランスという言葉が使

われてはいけない」、「男性の家事・育児が女性の就労を支えられるのならば、女性の就労が男性の育休を支える仕組みを作らなければならない」、「労働基準法に書いていなくとも一般的に認められている“忌引き”と同様に、“男性の育休”を社会的に認知される休暇とすべきである」…すべての言葉が私の胸に突き刺さった。

昔はお父さんのみの「一頭立て馬車」で家族という荷車を引っ張っていく形であったが、今は一頭で引っ張っていくには“荷物”が重すぎる…お父さんとお母さんの「二頭立て馬車」で歩いていかねばならない時代となった。仮に一頭が何らかの理由で少しの間動けなくなったとしても、常にもう一頭が引っ張っている体制。それが大事だと。

また、それに付随して話されたのが“宝くじ”として捉えた女性の働き方だった。女性が30歳ごろに第1子を出産して、そのあと正社員として仕事復帰したとして換算すると、男性が生涯の残業代として得られる賃金よりもはるかに多い1億円から2億円もの収入（地方と都市部で差が出てくる）が見込めるとのことである。要するに男性が家事時間の約半分を担い、女性の仕事に理解を示すことは、経済的にも合理的であり「宝くじが当たるのと

変わらない」と力説された。

最後に、『象の背中 旅立つ日』という8分弱ほどのマンガ仕立ての映像が流された。

ある朝、神様から「何日か後に死んでしまうこと」を宣告された象のお父さんとその家族のお話。象のお父さんはその宣告があつてから、会社の残業も断り、残り僅かな家族との時間を大切に。そして、愛する家族へ最後に温かい思い出を残しながら天に召される…そのような内容だった。

会場にすすり泣く音が漏れる切ない内容に、この日、瀬地山さんが仰ってきたいくつもの言葉が、今一度全ての聴衆に投げかけられたようだった。

「死を宣告されてからでは遅いんですよ…一家団欒で温かい食卓を囲む。こんな当たり前のことすら難しい時代となってしまった。それをみんなで正していかなければ」

瀬地山さんは講演会の最後を、その言葉で閉められた。

レポート 市瀬百合子（ぴゅあ企画・運営サポーター）



瀬地山角さん